カルヴァン『キリスト教綱要』神論Ⅱ　『綱要』１・１・１３～１４，
（『キリスト教綱要、第１篇・第２篇』（渡辺信夫訳、改訳版）１３１～２００頁

１　神の本質は唯一であって、それが三位格を含む

神の本質は無限であり、霊的であるとの聖書の証言から、古代の汎神論的な考え方とともに、マニ教の誤謬も退けられる。悪魔と神という二つの原理をたてるマニ教は、神の統一性を破壊し、その無限性を制約するからである。

神は、ご自身の内に三位格の区別を設けられたが、御自身を唯一なる方と宣言する。これは、三重の神を夢想したり、神の単一の本質が三つの位格に引き裂かれるかのように理解されるべきではないことを意味する。われわれに必要なことは、一切の誤謬から免れさせる簡潔で平易な定義を得ることである。ヘブル書１：３から明らかなように、聖書は御父に御子とは異なる「存在方式」（スブシステンティア）を帰す。それは、御父は固有性において御子とは区別されながらも、御自身を完全に御子として現わしたもうゆえに、御父のヒュポスタシスが御子において明らかにされていると言えるのである。これは、その後に付加されている「御子は御父の栄光の輝きである」という句と一致する。つまり、御父の内には父固有のヒュポスタシスがあり、それが御子において輝き出ると結論づけることができる。聖霊についても同じ論法で論じることができる、

これに対して、異端者たちは、それは人間の意のままに考え出された用語にすぎず認められないと批判する。しかし、上記の神についての説明は、聖書が証言し保証することであり、それを否認する方がはるかに不正であると言わねばならない。考え方と語り方の規範は聖書にあるが、それに己が精神の全ての思いと口の言葉とを合致させねばならない。教会が「三位一体」や「位格」という言葉を用いざるをえなくなった背景には、まさにこのような意味があるのである。

古代では、アリウス派は、不敬虔ゆえに、一方でキリストは神であり、神の子であると認めながら、他方で神よりも劣った一被造物であるとの主張を止めなかった。ホモウシオスという言葉に対して、極度の憎しみを覚えるとともに、呪いすら浴びせたのである。ホモウシオスという小さな言葉が、キリスト教の純粋な信仰とアリウス派の冒瀆の区別をはっきりとさせたのである。ホモウシオスという言葉についての議論は、ギリシア教父とラテン教父の間で長く交わされてきたことも事実だが、ここでは、事柄そのものについて考察してみよう。

位格（ペルソナ）は、神の本質（エッセンティア）におけるスブシステンティア（存在方式）であり、他の存在方式との関係を保ちながら、交流することのできない固有性によって区別されている。スブシステンティアは、分割をゆるさない絆でエッセンティアと結びつけられていて、分離はできないが、特別な印を帯びていて、エッセンティアと区別される。この三つのスブシステンティアのそれぞれは、他のスブシステンティアと関係しながら、固有性によって区別される。

それでは、御子と御霊の神性をどのように立証すればよいのだろうか（１４０頁）。神の言葉は、それが発せられると、いつまでも神とともに留まる知恵を指す。預言者たちも、使徒たちと同じく、キリストの御霊によって語ったが、まだキリストは現れてはいなかったので、言葉は世の初めの先に御父から生まれたと理解される。しかし、

預言者たちを器として働かせ給う御霊こそ、御言葉の霊であるなら、疑いも無く御言葉はまことの神であると言える。ヨハネ５：１７から、世の初め以来、御父とともにキリスト御自身が弛みなく働いてきたと確言することができる。

２　キリストの神性を公然と否定し奪い取る人々

しかし、教会には、キリストの神性を公然と奪い取る人々が存在する。彼らは、天地創造に際して、神は御口を開き、御言葉はその時ようやく存在し始めたにすぎないと主張する。

ここでは、キリストの仲保者としての位格については未だ語るべき段階ではないゆえに、キリストが肉体をとった御言葉であることをはっきりと確立するために、聖書の証言を列挙してみよう。カルヴァンは、１４２～１５１頁にかけて、旧約聖書と新約聖書の証言を示す。さらに１５１～１５４頁では、御霊の神性の証言を集め解説する。そして最後にマタイ２８：１９を典拠として次のように言う。「キリストが『父と子と聖霊の名によってバプテスマを施せ』と命じた時、言わんとされたのは父と子と聖霊に対する一つなる信仰を信ずることでなくて何であったか。そういうわけで、神は一人で在すと証しすることでなくて何であったであろうか」（１５４頁）。

さらにナジアンゾスのグレゴリオスを引用しつつ（１５５頁）、位格の三一性を考える時、思いを別々に引き裂いたままに留めて一に立ち帰らせないような想念が、心に浮かばぬようにしなければならにと言う。父と子と聖霊という語彙は、分割ではなく区別を表すのである。この区別の意味内容は、人間に喩えをとってこれまでなされてきたが、聖書に記された通りに、次のような区別を設けることができる。御父には、御業の初めと全ての事柄の起源と源泉が帰せられ、御子には知恵と計画と万事を行う配剤が帰せられ、御霊にはすべての活動の力と効用が帰せられる（１５６頁）。この三者には、御父―御子―御霊という順序を考えることは不当ではない。

しかし、このような区別は、神の単一性と矛盾するものでも、それを妨げるものでもない。御子は御父と一つなる御霊によって存立するゆえに、父なる神と一つであることがここから確証されるし、御霊は父と子の御霊であるゆえに、御父と御子と異なる他のものではないことも確証できる。一つ一つの位格に全本性が理解されるとともに、それぞれに固有性があるのである（１５７頁）。

しかし、サタンは我々の信仰を根底から引き倒そうと企み、三位一体の教えを歪めようと画策する。かつては、アリウスやサベリウスらによって、この企みが行われたが、今やセルヴェトやその同類の者たちが興って、新たな妄想に一切をくるみこんでいる。その偽りを手短に打ち砕く必要があるのである。

セルヴェトは、三位一体という言葉は、忌まわしいものと考える。なぜなら、彼にとって、三位一体とは、神は三つの部分からなるものとされ、神の唯一性と矛盾するからである。同時に、彼は、位格なるものは神の本質の内には実際には存在せず、神をわれわれにこの形あの形に描き出すいわば外的理念であると主張する。また、もともと言葉と霊が同じであったのだから、神には初め何の区別も無かったのに、キリストが神から出た神として現れて以来、霊はそこからのもう一つの神として流れ出たと考える（１６１頁）。

さらにこのようなセルヴェトの誤謬から、同類の怪物である反三一主義が生じる。

彼らは、セルヴェトの蒙った憎悪と汚名を免れようと、三つの位格は認めるものの、御父こそ真実な本来の唯一の神であって、それが御子と御霊を造り、それに御自身の神性を移し入れたと説明する。しかも、彼らは、御父が御子や御霊と区別される印は、御父のみが本質の元(エッセンティアトール)であるところにあるとするのである(１６３頁)。彼らは、キリストは神であると認めながら、御父とは異なると主張する。このようにして、彼らは、忌まわしくも、神の本質をずたずたに引き裂いてしまう。その結果、異端者たちは、キリストが礼拝されるべき方とは考えなくなってしまうのである（１６６頁)。

キリストの本質は、決して後から賦与されたものでも、名目上のものでもない。キリストに続いて、霊とまことをもって御父を礼拝するのでなければ、正しく礼拝していることにならない。すなわち、「キリストは首のもとで教師の務めを遂行することによって御父に神の名を帰したもうたが、それは御自身の神性を廃止するためでなく、むしろ我々をそこへ一歩一歩高めるためであった」(１６８頁)。異端者たちが、しばしばテルトゥリアヌスやエイレナイオスなどの古代教父を典拠にして、自己の教説の正当性を弁証しようとするが、それも無意味である。むしろ、教父を熟読すれば、今我々が擁護しようとしている教理の要点が、きわめて明瞭に語られていることを知るのである。

３　真の神への信仰と人間の本性

人間の愚鈍な知恵は、簡単に偽りの神の信仰へと堕落してしまう。そこで、真の神をもっと知ろうとしなければならない。確かに神は、人間の知恵と力と義において、はかり知り難い方である。そこで鏡としてモーセの歴史を我々の前に置き、御自身の生ける姿をそこで照り映えさせたまうた。つまり、目が弱くなった老人が眼鏡の助け無くして何一つ見分けられないように、聖書が指導してくれなくては、神を尋ね求めても、たちまちに消滅してしまうのである。

このような人間の本性を考察する前に、天使と悪魔について考えよう。ニカイア信条が告白する「天と地と、見えるものと見えないものの造り主を信じます」という箇条の中の「見えないもの」とは、天使と悪魔を含んでいる。

まず天使は、神の命令を遂行するように定められた神の僕であり、神に創造された存在である（１８０頁)。天使の創造の時期や順位を論じることはむしろ頑迷な固執であって、無意味で空疎な議論（マタイオーマタ）である（１８０頁)。神は、天使たちを使者として用い、御自身を人々に啓示される。彼らは「軍勢」ともよばれる。それは、「支配」「権威」「主権」などとも呼ばれるように、主なる神が天使たちを用いて、世界の支配を実行するからである。ただし天使の存在と働きには、迷信が入り込むことを防ぎ、常に天使の務めがキリストの執り成しによって我々に及ぶことを明らかにしておくことが大切である。

次に悪魔についてであるが、聖書が悪魔について教えるのは、我々が彼らの欺瞞と策謀に警戒させるためであり、最も強い敵を撃退して余りある堅固で堅牢な武具を装着させるためである（１８９頁)。サタンは、「この世の神」「この世の君」「強力に武装した者」「空中の権を執る霊」・・などと呼ばれるのも、これらの表現が我々の注意を喚起するからである。悪魔との戦いの軍務は、生涯続くゆえに、我々は奮いたって

耐え忍び、自分自身の弱さと愚かさを弁え、神の助けを祈り求め、神に信頼を置きつつなされねばならない。我々に謀と力と勇気と武具を与えるのはただ神のみだからである。

悪魔という敵は、一人や二人ではなく、大軍である。聖書中単数形で悪魔が語られる場合には、義の王国に対立する悪の主権を示すものである。教会また聖徒の結合体がキリストを首とするように、不敬虔な者らの分派も不敬虔そのものも、彼らの上に君臨する王とともに示される（１９１頁）。

われわれは、神の栄光を志すことこそがふさわしいとすれば、この栄光を消し去ろうとする者に対して全力を傾けて戦わねばならない。我々が、自分の救いのことを慮るならば、この救いを破滅させようと止むことなくつけ狙う敵と講和したり休戦したりしてはならない。旧約でも新約でも、悪魔は神の真理と戦い、光を闇によって暗くし、人間の精神に誤謬を満たし、憎しみを駆りたて、争いと戦いを燃え上がらせ、神の王国を覆し、人々を己もろとも永遠の滅びへと投げ込もうとするのである。悪魔は、本性上、悪性の、悪意の者である。

しかし、悪魔は神によって造られた存在である（１９２頁）。したがって、その妊計は、創造によるものではなく、堕罪によるのである。悪魔は、創造の時には、神の天使であったが、頽落して破滅し、他の者を破滅させる器となったのである。

このようなサタンに、神は闘争をもってのぞんで下さる。それは神の意志であり、神の是認したまうことである。悪魔は、本来悪性ゆえに、神の意志への服従に心を向けることは決して無く、全くの頽廃と反逆に没頭している。したがって、悪魔が意欲的かつ意図的に神に逆らうのは、それ自身とその悪念に由来する。悪魔はこの悪念にかられて、神に最大限逆らうと思うことを実行しようとする。しかし、神は御力をもって悪魔に手綱をかけて抑制されるので、悪魔は神の許可した範囲のことだけをなしうるにすぎない。

神は、汚れた霊を御旨のまま、あちらこちらに屈曲させ、これを用いて信仰者を戦いの中で修練される。悪魔に支配されないために、悪魔に機会を与えてはならない。信仰者は、信仰を堅くして抵抗しなければならない。キリストがすでに勝利を収めてくださっているゆえに、信仰者がサタンに征服されたり、圧倒されることはないが、悪魔の働きに機会を与えてはならないのである。

悪魔が永遠の裁きを受けるかどうかというような議論は、悪魔が全くの非存在であれば、これに対して永遠の裁きを定め、火が備えられるなどと考えること自体が無意味になるし、議論そのものが無益なものとなる（１９６頁）。

最後にこのような天使と悪魔が共存する世界という最も美しい劇場の中で、神の御業を目にあたりに示されているという敬虔な楽しみを味わうことが大切である。被造物と世界の中に、神の創造の目的を読み取ること、自然の秩序に信仰を教えるものを見いだすことは大切である。神は、御言葉と御霊の力によって無から天地を創造され、そこからあらゆる生き物、無生物を生ぜしめた。この驚嘆すべき世界、豊かさと多様性を持つ最高に豊かな調度品を揃えた広壮で華麗な邸宅のような世界から、創造者なる神の意図と目的を知ろうとするとき、我々は自分が実に神の子であり、神の誠実と保護の下に受け容れられ、養われ、かつ教育されていることも思い浮かべることができるのである（１９９頁）。